

【特別寄稿】

全国学校飼育動物研究会の視野は実に広い

小 野 田 正 利

(大阪大学名誉教授)

1 思いがけない鳩貝会長からのメール

10月1日の夕刻に、件名「生き物係が減った！を拝読しました」というメールが私のパソコンに入っていた。差出人は「鳩貝太郎」。最初は「？」と思ったが、1カ月前に原稿を書く際に、全国学校飼育動物研究会（以下「研究会」）の各種資料を何度も目を通していたので、記憶媒体の容量が実に少ない私の脳裏にも「あっ、鳩貝会長からの直々のメールだ！」と気づいて「安心して」開封した。

実は私は10年以上前から、主に全国の小中高校が定期購読層になっている発行部数約15,000冊の『内外教育』誌（時事通信社、毎週火・金曜日発行）に毎週2頁の「普通の教師が生きる学校—モンスターペアレント論を超えて」を長期連載（ギネス級）しており、第457回（2020年9月18日号）に『『生き物係』が減った！』という原稿を書いた。その中で、私が各地の学校訪問を繰り返すたびに、小学校の校庭から消えつつあるものとして、遊具類と動物飼育小屋であることから書き始め、研究会の活動内容を紹介しながら、文章の最後を次のように締めたのである。

《新型コロナウイルス感染症禍の中の学校で「三密」を避けるように万全の態勢をとり、子どもの下校後に消毒作業も加わる今の学校で、飼育動物どころではないことは明確だ。「今やろう」ということではない。コロナ禍の事態収束後の長い見通しの中で、動物飼育によるゆったりとした時間の流れを学校に確保し「いのちの教育」の意義の確認をしようではないかということだ。ご存じだろうか、9月20日から26日までは「動物愛護週間」である。》この拙文を、鳩貝先生は研究会

への「エール」であると理解され、その後に研究会誌（22・23号）を送付して下さい、あわせて「A4で2～4枚の原稿を書いて欲しい」と添えられていた。そのような経緯で、私はこの原稿を書き始めた次第である。

もっとも私は、学校飼育動物に関するどころか、それにかするような研究もしたことがない。何を隠そう、私は生命体だけでなく、およそ生きているかのような模擬ゲームである23年前に流行った「たまごっち」でさえ「キャラクターを殺してしまった」前科者である。わずか1週間で飽きてしまっただけで、1カ月後に開けてみると、完全に「やさぐれていた」。さらに1年後に引き出しの中から出してみると「死んでいた」という、育児放棄をする不埒な人間である。学校飼育動物って言われても専門でもないし、「何を書けばいいのかなあ」とプレッシャーを感じてしまい、しばらく目に触れないようにしていたが、締め切りの11月の足音が忍び寄ってきたので腹を据えた。

2 世界的にも珍しい学校での動物飼育

学校と保護者の関係づくりやトラブルあるいはクレーム研究という、世界で初めての問題現象に注目して、日本の教育問題の「いじめ・暴力・不登校」に加えて「保護者対応」をラインナップさせた私は、実は40年前から20年前までは、オーソドックスに外国の、特にフランスの教育制度の研究をしていた。「そういえば欧米諸国では、学校の敷地で動物を飼っているというのを見たことがないなあ、校庭に飼育小屋があるって聞いたこともないし」と思い出した。

先日、久しぶりに大阪大学大学院・人間科学研

究科の元の研究室(教育制度学研究室)を訪ねて、3月までペアを組んでいた園山大祐教授(比較教育制度学が専門)に会い、その場に事務補佐員として有江ディアナさんもいた。園山教授はフランスで初等中等教育を受け、国際研究交流にも尽力し、英語・フランス語・スペイン語はペラペラであり、3年前にはフランス政府から「シュバリエ勲章」を授与されている。有江さんはペルー生まれ育ちで、小学校の高学年で帰国し、英語・スペイン語が堪能で、かなりの国を訪問し、学校にも視察に行っている。最初は昼食時の単なる3名の雑談から始まったが「もう少し話を聞かせてくれ!」と懇願し、途中から私は2人にインタビュー調査をする形(完全に、この原稿執筆のためのネタ探し)になった。

担任教師の判断で、クラスのペットとしてハムスターなどを飼うことはあるが、教育的意味を含めて学校で動物(特に哺乳類)を飼うことは、世界的に見れば日本を除けば極めて珍しいことなのではないか、という議論になっていった。確かに教室飼育があることはあるが、終始子どもに世話をさせるというのではなく、長期休業中や土日は教師が自宅に持ち帰る。

有江さんはペルーの学校をいくつも訪れているが、そもそも小学校等では全日制学校が増えてはいるものの、なおもすべての子どもの就学を目指すために2部授業(同じ教室を午前組と午後組が使う)がなおも実施されているので、動物を飼うという余裕はまったくない。またスペインでは、動物との触れ合いを教えることはあっても、移動動物園のような形で学校への動物の貸し出しであったり映像教材を使ったりするとのことだった。

フランスでも飼育小屋が学校に置かれていることはないが「何らかの動物がそこにいる」ということはある。フランス中部の田舎町の小さな小学校に勤める定年まじかのロペス先生と、その学級に通う13人の子どもたちとの交流を描いたドキュ

メンタリー映画「僕の好きな先生」(原題: Etre et avoir, 2002年)は日本でも上映された。その冒頭シーンには水槽から逃げ出した2匹のカメが教室の床を這いまわる様子が映し出されているが、子どもたちは「それがどうしたの?」と、極めて平静である。おそらくわが国では「ワー」とか「キャー」といって、教室中が騒がしくなるだろう。

3 カメレオンと発達障害児

園山教授が語ってくれたフランスの小学校における「発達障害傾向のある子どもとカメレオン」の話が実に興味深いものだった。数年前に彼が、ある小学校の教室を視察した際に、体長30センチほどのカメレオンを胸に抱いている小学校5年生(最上学年)がいたという。フランスは児童の出席管理はかなり厳しくおこなわれるし、持ち込むものもチェックされるので、カメレオンは教室飼育動物である。

その学級に発達障害の傾向のある男児が進級した。その子にとっては、定時に教室に入り、おとなしく授業を受ける体制を整えることが難しいことがある。担任教師の説明によれば「特別扱い」でそのような行為を認めているという。「どうしたら彼が定期的に通学できるか」を考えて「あまり動き回ることをしないカメレオン」が最適だと教師は思ったようだ。その子は定時に学校にやってきて、カメレオンを一定時間抱いたり腕に載せたりし、自分なりに気持ちを落ち着かせ、それから自分の席に着くという。

わが国では「ボクにも触らせて」とか「抱くのは順番子だよ」となるのだろうが、他の子はそれをしない。この「特別ルール」は約束事として彼だけに許され、それをするのは朝の授業開始前だけで、休憩時間中でも教室内の水槽の中にカメレオンは入れられたままである。1年間留年していることもあって、彼は同学年の中では最も体が大きい。他の子にちょっかいをかけたりもせず、

性格は極めておとなしい。カメレオンはその子に合った動物なのかもしれない。カメレオンは生きているエサしか食べないので、担任教師が昆虫類を用意するが、時折はその男児もマッチ箱にバッタやコオロギなどを入れてきて給餌をすることもあるとのこと。

教師の深謀遠慮があったかどうかはわからないが、波及的効果として、他の子どもたちがカメレオンを抱いた彼の周りに集まるといったのだ。クラスメイトたちが「ちょっと違っているところのある彼」を受け入れ、彼も「自分が認められている」という気持ちになり、教室全体がやさしい雰囲気に包まれているという。

パリ市内の公立小学校ではあるが、自由教育を趣旨とする「フレネ教育」を実践する学校であるがゆえの措置であり、一般化されているわけではない。また冒頭で述べた「生きものの係」のように、わが国では「係活動」や「当番活動」が「特別活動」の領域として位置づけられているが、他の国では子どもたちの役割分担としての係活動などが実施されていることはほとんどないようである。

特別支援教育の進展の中で「合理的配慮」という概念と「具体的な措置」の拡大も進みつつあるが、上記の男児にとって「カメレオンを抱く」というのは、これに該当するものなのであろう。気持ちよく1日の学校生活のスタートを切るというルーティン（日課）が、彼にとっては、自ら名前を付けたカメレオンとの朝の挨拶なのだ。

4 わが国の特別支援学校では…

ひるがえってわが国の状況を見てみよう。私自身が訪問した学校の校長室で小動物を飼っていて、休み時間になると何人かの子どもたちが入れ替わり立ち代わりやってきては、それらに声をかけたり撫でたりして、また教室に戻っていく光景を幾度も目にしたことも多い。校長室で数時間話し込むこともあるのだが、ある学校で45分授業が終わるたびにやってきて、同じことを繰り返して

いる子どもがいることに気がついた。「あの子は、動物を触って、それで気持ちを落ち着かせて、次の授業に向かうんですよ」とわけを校長が語ってくれた。不登校傾向の子どもが、餌やりなどの動物の世話役となることで、生活リズムを安定させ、自尊心を高めていったという例は、幾つもある。

学校という場で、身近に動物と触れ合うチャンスは重要なものである。アニマルセラピー（動物介在療法）という、動物（特に哺乳類）との触れ合いが、人の健康の質を向上させることにつながるものが指摘されて久しい。ところが残念ながらそういったチャンスは、大きく減りつつある。

本研究会の第21回研究大会（2019年9月15日）において、大手前大学の中島由佳准教授が「鳥インフルエンザ後の小学校における動物飼育状況—全国の学校への調査結果」を発表しておられる。動物を飼育している小学校の割合は減少し、飼育の主流が鳥・哺乳類からメダカや両生類、昆虫などの「非鳥・哺乳類」に移行し「明治期から続いてきた、児童の情操を養い理科等の教材に役立てるための学校での鳥・哺乳類飼育は、もはや教材として扱われず、飼育委員を初めとする一部の児童しか触れ合うこともなく、その世話の負担のかなりの部分を教職員が担っている」（研究会『動物飼育と教育』第23号、2019年、14頁）と結んでいた。

小学校の多くには「特別支援学級」が併設されているために、動物飼育をしている小学校に通う限りは、様々な障害や障害傾向を持った子どもたちにとっては、それでもまだ学校内でそれらとの触れ合いのチャンスはあるだろう。しかし気になるのが「特別支援学校」の方である。かつては盲・聾・養護学校と障害種別だったものが、障害別での指導の壁をなくして「特別支援学校」に切り替わったのが2007年4月であった。それ以後、これらの学校では小学校以上に哺乳類や鳥類などの動物の飼育は激減しているのではないかと推察さ

れる。私自身も大阪・兵庫・京都・滋賀のいくつかの特別支援学校を訪問したことがあるが、飼育小屋を見たことがない（あくまでも私の管見の限りだが）。ただいくつかの特別支援学校では、近隣の動物園や農業高校などの協力を得て、動物に関する交流学习の取り組みはおこなわれている。

飼育動物からの伝染性の病気やアレルギーの問題なども相当に大きいため、特別支援学校に在籍するすべての子どもたちが動物と関わることは難しいこともあるだろう。ましてや特別支援教育に求められる専門的水準は上昇し続けているし、重度の重複障害のある子どもも増えているために、教師自身にそういった準備をする余裕がなくなっている。学校飼育動物の減少と教職員の多忙化は、くしくも相関関係があり、小動物を養い、めぐる余裕のなさは、教職員のゆとりのなさにつながっているように思える。

5 「コーシロー」と「カッタくん」

今年65歳になって大阪大学を定年退職した私は「昔を懐かしむ気持ち」がふっと湧いてくることがある。そんな中でまさに2020年10月に伊吹有喜著『犬がいた季節』（双葉社、2020年）が出版され、好評だという。伊吹さんは1969年三重県生まれで、第151回・158回・163回の直木賞の候補作家となっている。この作品は、彼女自身の出身である県立四日市高校に実在した犬がモデルとなっている。1988（昭和63）年夏の終わりのある日、高校に迷い込んだ一匹の白い子犬。保護されて「コーシロー」と名付けられ、以来3年おきの平成3年、6年、9年、12年の高校生を見守り続けてきた内容をオムニバスで綴っている。

コーシローは、高校3年生の生徒たちの恋、友情、進路、旅立ちを見守り続ける存在である。

もちろんフィクション（小説）ではあるが、今から30年以上前には、迷い犬が学校で「飼われる」ことは、校長や職員会議で合意され、安全が確保されれば「当時ではありえた」のである。今ならすぐに保健所に連絡されてしまって、なんらかの措置がとられてしまうだろうが。

そこでまた思い出したのが、ペリカンの「カッタくん」である。山口県宇部市にあるときわ公園には、数匹のモモイロペリカンが放し飼いされていたが、成長すると勝手に飛び立っては、給餌時には戻ってくるものもいた。その中で人間にも慣れた「カッタくん」と名付けられたペリカンは、好んで公園から800メートルのところにある私立明光幼稚園に「空から通園」するようになった。

当初は、くちばしが子どもの目の高さで「危ない」ということで教師たちが線を引き、“ここからは近寄っちゃだめ”としていたというが、園児たちと一緒に踊ったり遊んだりするし、触っても背中に乗っても動じないところから、たちまち人気者になっていった。1989年には明るい話題を提供したとのことで日本動物愛護協会より表彰を受けている。

迷い犬のコーシローにしろ、定期的に通園するカッタくんによ、本研究会が対象としてきた学校飼育動物というカテゴリーとは、やや違うのかもしれない。しかし研究会の目的規定には「学校における飼育動物や動物介在教育の在り方についての研究や実践を推進するとともにそれらの交流を深め、学校教育の発展に寄与する」（会則第3条）とある。先のフランスの発達障害児とカメレオンにせよ「学校という場で」あるいは「学校教育の一環として」何らかの動物と子どもたちが触れ合うチャンスはすべて、この研究会が対象とするものなのだろうと思った。